

紀行文の書き換えと文体の楽しみ

——明治四〇年前後の遅塚麗水の紀行文を中心に——

熊谷昭宏

はじめに

文壇における紀行文の名手の一人と目されていた遅塚麗水は、明治三九年から四〇年にかけて、同一の旅行に取材する四篇の紀行文群を発表している。「入蘇日記」(「都新聞」/明治三九年八月一日)、「御嶽の一夜」(「中央公論」二二一八/明治四〇年八月一日)がそれである。この四篇はそれぞれ、信州の御岳に登るエピソードが描かれるという点で共通しているが、微細なエピソードの有無や、会話表現の多寡、文体などの点で異なった様相を呈している。特に文体については、「入蘇日記」、「御嶽の一夜」、「木曾山の一夜」の三篇が漢文調の文語体であるのに対して、一番最後に発表

された「御岳の一夜」だけは、(言文一致的)な文体がとられている。麗水はそれ以前の明治三八年にも、「乙女越」(「都新聞」/明治三八年二月一七日)、「雪の乙女峠」(「太陽」一一一五/明治三八年四月一日)という、やはり同一の旅行に取材した紀行文を二篇発表している。前者は(言文一致的)な文体、後者は漢文調の文語体を用いた美文で書かれている。ここでも同一の素材に基づく二篇の紀行文が異なる文体で書かれているのだ。^①

御岳登山に関する四篇の紀行文が発表された明治三九年から四〇年という時期は、日本の文壇において自然主義的な思潮が隆盛を迎える時期と重なっている。紀行文についても、いわゆる自然派の陣営が美文的なものを古い紀行文として切り分けようと試みていた。漢文調の、古いタイプとされる紀行文を得意とした麗水が行った紀行文の書き換えは、そのような状況とどのような関係をもつ(ある

いは、もたない)のだろうか。本稿では、素材を同じくする麗水の複数の紀行文の分析から、紀行文を書き換えるという行為が持つ意味を考えることとする。

一 麗水が書き換えた紀行文の例

明治三九年の七月末、東京の新聞・雑誌記者たちによって「南信探勝隊」なる団体が組織され、翌八月月上旬に長野県南部を中心に旅行するという出来事があった。麗水は「都新聞」記者としてこの「探勝隊」に参加し、同紙に「入蘇日記」という紀行文を約半月の間連載した。ただ、麗水は他の「隊員」たちとは異なり、この「入蘇日記」連載後にも、「探勝隊」の旅行を素材にした別の紀行文(以下、「探勝隊関係紀行文」と総称)を数篇発表している。「入蘇日記」以後、「御嶽の一夜」、「木曾山の一夜」、「御岳の一夜」という順に発表されたこれら探勝隊関係紀行文は、「探勝隊」の旅行、特に御岳登山のエピソードを描くという点で共通している。しかし、その内容を詳しく比較すると、それぞれ、種々のエピソードの取捨選択が行われていることがわかる。さらに本稿で注目したい文体については、先にも指摘したが、最初に発表された「入蘇日記」から「木曾山の一夜」までの三篇が漢文調の文語体であり、最後の「御岳の一夜」が〈言文一致的〉文体で書かれている。ここでは、「入

蘇日記」と唯一一言文一致に近い文体である「御岳の一夜」との比較を中心にして、紀行文の書き換えについて考えてみたい。

まず、エピソードの取捨選択についてであるが、「入蘇日記」は麗水をイベントに派遣した「都新聞」に発表された旅の報告記事ということで、時系列にそって旅程がまんべんなく描かれている。対する「御岳の一夜」では、描かれるエピソードが御岳登山に限定されている。しかし、「入蘇日記」では極めて簡単に描かれていた山小屋の主人とのやりとりが、滑稽な会話を伴ったものとして挿入されている。次に示すのは、「入蘇日記」において、深夜の登山を制止する山小屋の主人と強行しようとする「余」らのやりとりを描いた箇所(「入蘇日記」七)の引用である。

小屋の主個おまわは懇ろに余等の留宿を説きたれども逸り男おとこの耳傾むくべくもなし、主個より提燈ちとうと行燈あんちゆうと各一個を借り得て僅に路を照し、やがて闇は漆のごとき檜楨帯ひのきの大森林に入りたり

このエピソードは「御岳の一夜」にも取り入れられているが、ここではさらに、次のような具体的なやり取りが描かれている。

『亭主、松明を売つて呉れ』(略)

『人の聲音がすると、山蛭が墮ち蒐ります、火を見せたら堪りません、疣胡瓜のやうな奴が、頭へ落ちて血を吮ひますぞ、』

「虚言を吐け、胡瓜のやうな奴があつて堪るものか、有つたら勿怪の幸ひだ、塩をつけて嚼つてやる哩、」

もちろん、「中央公論」「説苑」欄の一記事として発表された「御岳の一夜」には、スペースが制限されていたという物理的な問題が背後にあっただろう^③。そのため、素材としての全エピソードを取捨選択して紀行文としての体裁を整える必要があつたはずである。

ただ、本稿で注目したいのは、先の引用からもわかるのだが、両者の間の文体の変化である。より興味深いのは、日の出を迎え、朝日によって刻々と変化する周辺の山岳の様子を描いた箇所である。

以下に「入蘇日記」、「御岳の一夜」それぞれの該当箇所を引用する。実に荘嚴なるは高山の暁なり、余等が立てる峰のみ残して、
涯際も知らぬ大洋の、巨浪天を蹴つて起つに似て而も寂寞として声もなき屯雲は、灰白色に拡がりて一望千里の外に亘り、其の雲の尽るところは、縹碧の色に澄める空、其の空はやがてほのくくと紅潮せしが、見る／＼うちに燃ゆるばかりの朱を沸して、平布の雲は爛れしごとく遽かに紫に色を変へて、動揺み起つと見る間に疾く、日は躍然として東海の涯より輾り昇り

(「入蘇日記」九)

高山の暁ほど荘嚴なものはない、

余の立つて居る此峯の角を残して、際涯も知らぬ大洋の巨浪天

紀行文の書き換えと文体の楽しみ

を蹴つて起るやうな灰白色の屯雲だ、其の雲の尽きたところは、
鮮碧の色に澄んだ空だ、遙かな空の彼方にほんのりと紅が潮す、次第に濃くなつて来て、石竹の花のやうになる、旋て燃ゆるやうな朱を湧かす、灰白の雲は看る／＼脂色から鳶色となる、
又た一変して橙黄となり、爛れ頰れて倏ち熟した葡萄の色となる、と思ふと紫金の覆輪を取つた、銅盤のやうな日が、徐々と輾り升る

(「御岳の一夜」)

ちなみに、「御嶽の一夜」、「木曾山の一夜」の二篇については、「入蘇日記」とほぼ同様の描写がなされており、麗水による明らか(「使いまわし」)が認められる。「入蘇日記」の漢文調の美文による描写と「御岳の一夜」の描写とを比較すると、後者では、「鮮碧」、「脂色」、「鳶色」、「橙黄」といった色彩語が新たに用いられていることがわかる。これらの語は、洋画、特に明治三〇年代になって流行し始めていた水彩画に関する言説群の中に散見するのである。明治期に活躍した紀行文家の一人小島烏水は明治四〇年、
紀行文における色彩語の使用について次のように述べている^⑤。

よく此頃の紀行文に、空はコバルト色をしてゐるとか、水がセピア色に流れてゐるとか、水彩画家の刷毛から滴れさうな言語を用ひて、新しいつもりである人々を見受けるが、これは新しいかも知らぬが、骨折損のくたびれ儲けて、何の効果があら

うとは思はれない

麗水も「此頃」の流行を取り入れていたのだと言えよう。そして烏水の評価ほどではないにしろ、引用箇所全体を見渡した時、成否は別として、「大洋の巨浪」、「屯雲」、「石竹の花」といった表現が喚起するイメージに片仮名の色彩語がうまく合致しているかどうかという点に、やや疑問が残る。それぞれの語の対応関係を見ると、「鮮碧」が「縹碧」に対応していることはわかるのだが、「脂色」、「鳶色」、「橙黄」という語については、具体的に対応する語を「入蘇日記」から見つけ出すことができない。新しい色彩語の使用は他の語とのバランスを不安定にしているだけでなく、「御岳の一夜」が「入蘇日記」とは異なる新たな風景として日の出を描き出すことにつながっている、という指摘ができる。

「入蘇日記」と「御岳の一夜」との間に見られる書き換えは、ごく簡単にまとめられるならば、文語体から〈言文一致的〉な文体へ、というものであったと言える。その意味において麗水の行為は、文語体から言文一致体へという近代の文体変遷の物語に回収されるべき出来事となり、一人の作家の進歩・発展の物語としても語ることができるかもしれない。しかし、この問題はそう簡単には片付けられないのだ。

この書き換えを近代の文体変遷の物語に性急に組み込めない理由

として、麗水がこのケースとは逆の書き換えをそれ以前に行っているということが挙げられる。その書き換えが、「乙女越」から「雪の乙女峠」への書き換えである。「乙女越」と「雪の乙女峠」は、明治三八年二月に麗水が友人二人と共に富士山を望む雪の乙女峠に出掛けた旅行を素材とした紀行文である。以下に引用するのは、乙女峠から眺めた富士山の様子を描いた箇所である。

乙女峯上より望んだ富士の絶代の壯観であることは、曾て聴いたが、今始めて此の峰頭に立つた余は、実に想像以上の壯観であることを思ふたのであつた、若し此の日快霽であつたらば、更に一段の瑰麗の観を加へたであらうが、生憎乱雲天を掩ふて、此の綽約なる雪の岳蓮の半分以上を隠して仕舞つたには少からぬ憾みであつた（略）見る間に天は微雪を催し、雲奔々と走るところ、忽ち皓然たる富士の高峰の空高く露はれた、三人覚えず躍り上つて欲呼した

（「乙女越」六一）

富士は那辺と聘望すれば、密雲裾野の半を呑みて、玉玲瓏たる岳蓮を掩ひ隠せり、若し雲の吹き霽れて、白皚々たる一万二千尺の大岳を露はし来りしならば、其の壯観は如何ばかり（略）頑雲忽ち破れて天半高く皓然たる富士の巔を露出したり、秀麗瑰奇、物の此の観めに喩ふべきなし、三人恍然たり

（「雪の乙女峠」）

両者とも、秀麗であると思われる富士山を雲が覆い隠しており、残念な気持ちでいたところ、突然雲が晴れて富士山の壮大な姿が眼前に現れて一同が感動した、というエピソードと風景が描かれていることに変わりはない。

しかし、一読すればわかるのだが、麗水は〈言文一致的〉な文体で「乙女越」を書き上げて「都新聞」に発表し、その後ではほぼ同じ旅行の様子を今度は漢文調の文体で描き、「太陽」に発表しているのだ。田山花袋が「明治の文章家には、漢文の影響を受けた人が随分多い」^⑥中で、「美文の側では、一番多く漢文の影響を受けて居るのは、遅塚麗水氏の文章であらう」^⑦と述べるように、麗水は漢文調の美文の名手として認知されていたのである。

もちろん「乙女越」の文体は、「雪の乙女峠」と比較して相対的に〈言文一致的〉であるにすぎない。例えば、ある対象を形容する表現に注目すれば、しばしば漢文的な「瑰麗の」、「皓然たる」といった表現が用いられている。特に「皓然たる富士」という表現は両者で共通している。その意味でも〈言文一致的〉文体と称するしかない。それは、「大蘇日記」と「御岳の一夜」との間の関係についても同様である。それだけに、読者が簡単に比較できるような形で評価の高い文体と〈言文一致的〉文体とを披露したという、その事実に注目しなければならない。

紀行文の書き換えと文体の楽しみ

ここで、文語体と〈言文一致的〉文体のどちらが先に発表されたか、ということに余り重きを置いてはいけなйдらう。むしろ、異なる文体に書き換えるという行為そのものに意味や価値があると考えた方がよいのではないだろうか。

麗水は小説家でもあり、「乙女越」以前に彼は既に会話等に〈言文一致的〉文体を用いている^⑧。では、小説で試みた文体を、得意の紀行文に応用したのが「乙女越」で、お馴染の文体に書き換えたのが「雪の乙女峠」である、という結論を導けばよいのだろうか。しかし、それは短絡的であろう。

〈なぜ〉書き換えが行われたのか、という問いも重要であるが、本稿では、書き換えることで紀行文が〈どう〉なったのか、ということを考えてみたい。それにより、〈なぜ〉書き換えられたのか、という問いの答えにも近づくと思われる。

実は麗水はこの後、紀行文の言文一致化を行ってはいない。そこから今度は、流行の言文一致体の常用を目指すも挫折した、というような作家論に向かう可能性がある。が、「乙女越」のレベルの〈言文一致的〉文体ならば既に発表していたのだから、これも否定されるべきだろう。やはり、回数は少ないが、ある意味で無節操とも言える文体の選択を行う可能性を読者に示したことが重要なのである。この書き換えについては、もう少し異なった視点から眺めて

みることにしたい。

二 明治四〇年前後の紀行文と文体

ここでは、同時代の言文一致体をめぐる言説に紀行文をめぐる批評の数々を接続させ、そのうえで麗水の書き換えの意味を再検討したい。そのような手続きの後に、どのような状況が見えてくるのだろうか。

紀行文という枠組みにとられずに明治四〇年前後の、主に〈文学〉に関する文体論を眺めてみると、その主流は、改良を加えた上で言文一致（口語）体にすべきだ、というものであった。例えば、明治三九年五月の「文章世界」では「言文一致につきて」という特集が生まれ、作家を含めた知識人たちが各々当時用いられていた〈言文一致的〉文体について、持論を発表している。その中で芳賀矢一は、日本の「将来の文体はどうしても言文一致体で無ければならぬとおもふ」^⑨と主張している。また、上田萬年は、「将来の文体は必ず言文一致になるであらう、否^いな、ならねばならぬ。（略）改善を加へて其の進歩を計らなければならぬ」^⑩と述べる。内田魯庵も、「将来の理想的文章なるや否やは断言出来ぬが（略）進歩し行く時代の概念を現すに相応しき物たるは疑ひを容れぬ」^⑪という展望を語っている。言文一致化を強く啓蒙するものではないが、紀行文

という〈文学〉の一ジャンルをめぐる場でも、明治三〇年代半ば頃から、未来の文体を希求する論調が見られる。例えば紀行文家の小島鳥水は明治三六年、紀行文の文体について、

漢文もしくは漢文直訳体が、靈活なる自然を叙するに足らないことを、余は断言すると同時に、新語を輸し、創^つめ、練り、淘汰して、はじめに叙景の新文章を作るに達すべく、今はその門出であるとおもふ、而してその文章は、俗文、雅俗折衷、言文一致、何でも可なりといへども、根本は写生に重きを置かざる可からず^⑫

と述べている。彼は言文一致体こそが未来の文体であるとは言わない。しかし、既存の文体とは異なる「明治の新文章」を強く求めているし、それが言文一致体や「俗文」であるという可能性自体は否定しない。

明治四〇年前後の文章「作法」書や「文範」類を概観すると、紀行文における言文一致体の使用については概ね肯定的であると言える。さらに、それらを詳しく見ると、やはり、言文一致体使用のリスクを説きつつ、未来の文体として認めるというパターンが一般的であることもわかる。例えば博文館の「通俗作文全書」第六編として刊行された西村真次『紀行文作法』（明治四〇年二月二八日／博文館）の第六章第一節には、

将来の文壇を支配する用語は、口語（殊に標準語）なりとすれば、当然言文一致体は将来の文体とならざる可からず、殊に思想益々複雑となりて、到底在来の文語を以ては充分にそれを発現すること能はざるやうに成りたれば、紀行文の如く精細なる叙記を必要とする文学に在つては、殊に新文体を執らざるべからざるや勿論なりとす。

という、文体に関する見解が示されている。紀行文の初学者にその「作法」を説く西村は、ここからわかる通り、「将来の」紀行文の文体としては言文一致（口語）体を想定している。しかし、第六章第二節では、「その弊」として、「冗漫に流れやすきこと」、「没趣味に陥るの恐れあること」、「余韻を失ふこと」、「平板に流れ易きこと」、「乾燥になる恐れあること」、「露骨に失すること」という、言文一致体使用に伴う六つのリスクも提示している。西村の展望では、将来的にこれらのリスクをカバーする文体が整備されなければならぬ、ということなのだろう。その段階に至る前の明治四〇年の時点では、紀行文において複雑な「思想」の表現を実現するため、「冗漫」、「没趣味」といったリスクを考慮しつつ言文一致体を用いているのがよい、という啓蒙をここから読み取ることができる。

このように紀行文において言文一致体への移行が啓蒙されつつあった時期、麗水が得意とする文体は、批評により、旧派のものとし

て取り上げられることがしばしばあった。一連の「探勝隊関係紀行文」が発表された後の明治四〇年十一月、「文章世界」誌上に「今の紀行文家（合評）」という合評が掲載された。ここでは片上天弦ら早稲田出身の若手作家たちが、彼らより年長の紀行文家たちの紀行文を思い思いに批評している。批評の対象は大町桂月、久保天随、小島烏水、田山花袋、そして麗水であり、花袋に対する以外は概ね辛らつな批判が展開されている。この合評で片上天絃らは、主に紀行文の内容と文体の二点に注目し、それぞれの紀行文家を批評している。その中で麗水への批判を拾ってみると、例えば吉江孤雁は、

此人のは徳川時代の漢文脈を一番伝へたる紀行文だが、（略）その脈を伝へた筆で明治の自然や人事を写すのだから無理だと思ふ。従つて又時代後れの物だといふ感じがするのであらう。

（略）其まづな麼語は何処の山へでも当嵌あてはまるから、地方色を出すには非常に損である。

と述べている。前田木城も同合評で、「此人は清朝の漢文から出ているのだから、今の青年を相手に書くものとしては損である」と、同様の批判を行っている。麗水の紀行文が批判されるのは、特にその文体が「明治」という「今」に合わず「時代後れ」であるという点においてである。

それではこの時期、他の紀行文家たちがこぞつて文体の改革を行

つていたのかというと、そうではない。例えば、麗水と並び称される紀行文の大家、大町桂月は、明治四〇年の時点でも麗水同様文体による紀行文を書いている^⑭。明治三〇年代以降の〈文学〉の場における言文一致体の普及を定着し進歩の物語として語るならば、桂月は文体の進歩・発展の潮流に乗れなかった、あるいは背を向けた旧派の作家、ということになるだろう。

ただ、依然として美文摘句集の類が数多く出版されていたことからわかるように、麗水や桂月が得意とする文語の美文は決して〈文学〉の範疇から葬り去られたわけではなかった。若手作家たちからこき下ろされた麗水の文章は、明治三〇年代後半以降も、やはり美文摘句集や文範等では参照すべきものとしてよく採用されている^⑮。麗水を古い紀行文家として位置付けようとした前田木城が田山花袋と共に編集した「文範」集『新古文範』（明治四二年一二月一七日／博文館）には、麗水の紀行文の一部分が収録されている。次に引用するのは「富士山の朝暎^⑯」と題された文章の一節である。須臾^{しゆん}にして冥中混沌のところ依稀^{いし}として五彩の斑文^{はんぶん}を作し、次第に鮮明を加へて光錠陸離^{くわうていりく}、遂に混して腥血の色をなす。裡に物ありて浮べり。（略）石室の人曰くこれ太陽なりと。（略）忽ち大錠の一下に逢ふ如く千千道の金筋直ちに天を射り、溟中腥血の色逆だち起ちてこれを追ひ、太陽乃ち躍如として昇る^⑰。

この引用に付された、花袋によると思われるコメントは、以下のようなものである。

其描法飽まで空靈の趣を尽し、人をして富士山上の影気に触るゝが如き思ひあらしむ。（略）吾人竊かに思へらく、赤人の吟詠以後、富岳のことを記して其秀を山霊と競ふに足るべきもの、独り此篇ありと。

注目すべきは、「人をして富士山上の影気に触るゝが如き思ひあらしむ」という評価であろう。「文章世界」誌上の「合評」では、麗水の紀行文は「何処の山へでも当嵌まる」表現が多く「地方色」が出せていないとされたが、この「文範」集では逆に読者に与える実感が高く評価されている。しかも、引用されているのは「合評」からさかのぼること一四年も前の紀行文である。

麗水は〈文学〉論の類を余り残していないが、数少ないものの一つに、成功雑誌社編『作文秘訣』（明治三八年四月一日／成功雑誌社）所収の「紀行文の妙訣」がある。そこで麗水は「文章」を「現実」的なものと「理想」的なものに二分した上で、「前者は通俗に流れ易く後者は架空に失し易い」とする。そして「理想現実共に能くする手段としては余は先づ紀行文を学ぶが適当なり」と、紀行文を書くことの効用を説くのである。さらに麗水は「紀行文の妙訣」の中で、紀行文家の目的について次のように述べている。

実象其儘を写し取り、翻へつて此の我が文章を読むものをして、反対に文の虚に対する恰も実に対する如く、其心を文章に奪はしめるやうにすれば、紀行文の妙最早茲に尽きたりと言つて可なりである

麗水は決して「現実」自体を否定してはいない。この「紀行文の妙訣」では、ほかに「平生眼に慣れざる境を求めて之を涉獵し歩くが肝要」で「文士は須らく多く旅行をすべ」きであるという提言もしている。作者が実地の旅行をもとに書いたということを保証することによって、紀行文における「現実」性を確保しようという狙いがうかがえる。

孤雁や木城の言う「地方色」の描出や「特殊」を描くことの究極の目的が、本物の旅をしているかのように、読者の想像力を刺激することにるのであれば、麗水の提唱する方法もその目的にかなったものではないだろうか。若手作家らが批判を重ね、躍起になって周縁化しようとした旧派の文章は、少なくとも文壇の中心を一步出た地点では紀行文を書くための模範として十分に力を持っていたと言わざるをえない。また、「虚」対「現実」という二項対立を自然派の人々と同様前提としていた麗水が「現実」を意識していたのは、当然のことである。

しかし、それでも気になるのは、紀行文の書き換えに伴う意味内

紀行文の書き換えと文体の楽しみ

容の変化である。エピソードの取捨選択については、それまでの紀行文で描かれなかった「現実」を描いたものとして説明できる。だが、日の出の描写については、先に分析したとおり、新たな風景を現出させてしまうことになっているのではないか。これは、「乙女越」と「雪の乙女峠」との関係（特に先に引用した富士山の描写）についても同様の指摘ができる。「御岳の一夜」には「鮮碧」などの語が用いられ、「入蘇日記」等では同じ風景の描写にもかかわらず、それらが用いられない。これは文体の変化に伴った語の選択の結果だろう。皮肉なことだが、漢文調の美文の名手が用いた〈言文一致的〉文体が、〈翻訳〉を超え、新たな語とイメージを引き寄せ、新たな風景を描き出してしまふことを見せつける結果になっている。これを「虚」対「現実」の二項対立に差し戻すと、自然派作家の論理に回収され、麗水は書き換えにより「虚」を描いた（前後どちらが「虚」かはともかく）という評価しか行えないことになってしまう。

三 紀行文における文体の置換

最後に、文語体と言文一致体との間の書き換えと、両者の従属関係のあり方を同時代の文章「作法」書の例から確認し、麗水による紀行文の書き換えの意味の考察に接続させてみたい。

先に確認したように、明治四〇年前後の言文一致論者たちの説明を集約すれば、文体の言文一致化は文章に「思想」や「明瞭さ」をもたらしというものであった。仮にそうだとするならば、文語体から〈言文一致的〉文体へとという麗水の書き換えは、「思想」なき紀行文に「思想」を吹き込む作業だということになるのだが、それは当然誤りである。もちろんその逆の書き換えが、「思想」のある紀行文から「思想」を抜き取ってしまうことになるわけでもない。麗水の書き換えについては、「思想」、「明瞭さ」などと別目的を見るべきである。ここで先に述べておくならば、それは文体の置換そのものの楽しみのようなものであると考えられる。ここでは、麗水が紀行文の書き換えを行った明治四〇年前後に見られた、文壇を離れた場における、文体の書き換えの状況を見てみたい。そして、そこから導き出される同時代の文体置換の意味をもとに、麗水による紀行文書き換えの問題を再検討するつもりである。

文語体を言文一致（口語）体に書き換える技術は、言文一致体の優位性が認められていけば、〈文学〉の場以外でも、文章を書く機会のある人々に当然要求されることになる。そして、その技術の習得を謳う「作法」書が登場するのも自然な流れである。例えば、大畑とよ『新女子ふみの林』（明治四〇年一月二日／松陽堂）という女子向けの書簡文「作法」書では、様々なテーマに沿った文語体

の文章の作例、つまり「文範」が提示されている。注目すべきは、それぞれの作例の後にセットで付されたもう一つの「文範」である。ここでは、先に提示された文語体の「文範」を言文一致体で書き表したものが紹介されている。例えば「花見に誘ふ文」というテーマの文例は以下のようなものである。

昨日今日のうら、かなる日につれて上野の桜、向島の花ひとしほ美事にみことひよし新聞紙上に見えまうらうへば一日ゆるく花見致し日頃の鬱うらを晴らしたくうらへども、あなた様には思召し如何にうらや御都合よろしくうらはゞ塵た、ぬ中に打立ちて朝露の花も見たく存じうらひよろづは句ひゆかしうらき桜の影にとあらくうらかしこ（略）

○言文一致作例

明日は日曜ですから、ゆるく上野のあたりに、花見をし、日頃のうさを晴らさうと思ひますがあなたは、思召いかゞです、若しも御同行ができますなら、此上ない喜びです、御返事のはどをひとえに

この書簡文「作法」書の狙いはもちろん、書簡文の基本としての文語体の型を訓練することにある。しかし同時に、文体の新たなスタンダードとなりつつあった言文一致体を、書き換えの能力という形で読者に身につけさせるといった目的も果たそうとしているのだ。

ただ、このように、後に優勢となる文体へと向かう言説のみに注目してはうまく説明しきれない文章の啓蒙が、同じ明治四〇年代にはなされている。

芳賀矢一校閲、友田宜剛編述『新中等作文教本』巻一（明治四五年二月五日／晩成処）は中学生用の作文教科書である。その中の第八「日記紀行文」の末尾には、「左ノ口語体ノ日記ヲ文語体ニ改メヨ」という一文に続いて、左のような文章が提示された箇所がある。

七月廿五日 午前中は家に居て書物を読んだり雑誌を見たりした。午後、山田君が来たので、いつしよに出て商品陳列館を見て、それから、銀座に行つて絵葉書を買つた。帰りみちに日比谷公園を散歩して、機械体操を見た。職工でも小僧でもなかなかやる。練習の功は大きいものだと感じた。

練習といふことはわが師ともなり長者ともなつて我を指導してくれるものだ。

これは明らかに、言文一致体の文章を文語に書き換えることを訓練するものであり、先に挙げた『新体女子ふみの林』で示される文体の置換とは逆の置換の方法が教授されているのである。もちろん、ここで文語体と言文一致体の価値が単純に逆転しているわけではない。また、「思想」を表現できない古い文体と、それができる新しい文体、という対立も見られない。この文章課題の出題が問いとし

て成立するのは、ある文体は自由に異なる文体へ（翻訳）できる、という前提が読者と編者との間に共有されているためである。この『新編中等作文教本』には「口語ヲ文語ニ改作スルコト」という項目が独立して設けられており、そこでは、「口語ト文語トハ、初歩ニ於テハ大差ガ無」く、「口語ヲ文語ニ改作スルニハ、ソノ趣キニ注意」すべきである、という教えが説かれる。ここでは、「口語」と「文語」の価値の上下が明らかにされていないうえに、「口語ヲ文語ニ改作スル」目的もはっきりしない。

これらの文章「作法」書では、「思想」や「明瞭」さを効率的に盛り込むための技術が教えられるのではない。そうではなくて、その技術が同じ対象について、文体を選択して器用に自在に書き分けること自体が目的化され、教えられているのだ。そこに文体間の明確な価値の上下は見出せない。¹⁹

麗水の問題に立ち返れば、彼が行つた紀行文の書き換えも、同じ風景を自由自在に異なる文体で書き換えられる技術を認める、このような評価基準が存在したために成立し得たのだと考えるべきだろう。

ところで、先の分析の通り、麗水の紀行文では、ほぼ同じ継起の日の出を描いた風景描写において、文体の置換それ自体が目立っている。風景描写は文語体から〈言文一致的〉文体へと〈翻訳〉を試

みられた、という言い方が一応はできる。しかし、これも先に分析した通り、「御岳の一夜」では言文一致化に伴い、洋画由来の新たなイメージが付与されている。また、「乙女越」と「雪の乙女峠」においては逆に、〈言文一致的〉文体から文語体への書き換えが行われていることから、この試みが「実象其儘」や「明瞭」さ、「思想」の「複雑」化を狙ったものではないことも明らかである。

言文一致（口語）体は「内面」、「思想」の受け皿としてだけではなく、文壇の最前線では閉塞情況を迎えつつあった美文の一つのバリエーションとしても期待されていたと考えられる。このような文体の戯れが進歩的言文一致史の傍らで行われていたことを忘れてはいけない。

おわりに

繰り返すが、麗水の文体置換や書き換えを訓練する文章「作法」書の説明を前にして、どちらの文体が「実象其儘」か、という問いは有効ではない。麗水の戯れにも似た紀行文の書き換えはその後に続くものではなかったし、流行を生むこともなかった。麗水と彼の読者の共有する「現実」感は、あくまでも美文的文語体によりもたらされていた。それはおそらく、「失敗」と呼べるような実践であっただろう。しかしその「失敗」は、風景の「現実」つまり「実象

其儘」というものが言語でしかないことを明らかにしている。現在ではもはや言い古されてしまった、このような風景のからくりを露骨に示してしまうのが、麗水による紀行文の文体置換であろう。そしてそこでは、「思想」や「内面」がどこにあるのかといった問いをはぐらかし、それらが文体により自然に運ばれるものではないことも示される。彼の戯れは言文一致の幻想をあざわらうかのように、〈文学〉史の中に静かに刻まれているのである。

注

- ① 同一の素材を用いたという点のみに着目するならば、「飛驒越日記」（『都新聞』／明治三五年九月二日～一〇月八日）と「飛驒紀游」（『太陽』八―一二／明治三五年一〇月五日）や、「阿賀の川舟」（『都新聞』／明治三八年八月一〇日～八月二三日）と「阿賀川紀游」（『太陽』一一―一二／明治三八年九月一日）という組み合わせも見出すことができる。
- ② 「南信探勝隊」への参加者には雑誌「太陽」記者として派遣された長谷川天溪や、漢詩文の名手結城蓄堂なども含まれている。さらなる調査を進めてこの企画の詳細と意義を明らかにしたい。
- ③ 「御岳の一夜」は、二四字×一八行の二段組で五頁という分量で掲載された。同じ明治四〇年の「中央公論」の「説苑」欄を見ると、一〇頁以上の記事もあるが、多くは四～六頁である。
- ④ 例えば美術雑誌「みづゑ」創刊の中心人物である大下藤次郎の水彩画指南書「水彩画階梯」（明治三七年四月一七日／内外出版協会）にも、「御岳の一夜」で使用されている「レモンエロー」「セピア」「エメラル

ドクリン」(「エメロート」つまりエメロートと同義)という語が絵の具の色として紹介されている。

- ⑤ 小島烏水「紀行文論」(「文庫」三五二／明治四〇年九月十五日)。
- ⑥ 田山花袋「美文作法」(明治三十九年二月二日／博文館) 第参編三。
- ⑦ 田山花袋「美文作法」(※注⑥に同じ) 第参編三。
- ⑧ 例えば「富籤」(「太陽」七一三／明治三十四年三月五日)の会話表現は「言文一致的」文体である。語りにも、

突如に雨戸が、らり、驚いて回顧くと、刺栗頭の、紅螺唇の、穢れた印半纏を毛抜合せに三尺帯で白髻に食ひ入るほど締めつけた、赭顔の男である。

というように、「不十分」さはあるが、文末に「である」を用いるなど、「言文一致的」な文体が認められる。

- ⑨ 芳賀矢一「漢文の羈絆を脱せよ」(「文章世界」一一三／明治三十九年五月一日)。
- ⑩ 上田萬年「言文一致は果して冗長か」(「文章世界」一一三 ※注⑨に同じ)。
- ⑪ 内田魯庵「理想的言文一致」(「文章世界」一一三 ※注⑨に同じ)。
- ⑫ 二谿子(小島烏水)「紀行文に就きて 三 紀行文と写生 漢文及直訳調の紀行文を難ず」(「文庫」二四二／明治三十六年九月一日)。
- ⑬ 天弦・葉舟・孤雁・木城「今の紀行文家(合評)」(「文章世界」二二一三／明治四〇年二月五日)。
- ⑭ 例えば、大町桂月「高尾山」(「文章世界」二一四／明治四〇年二月一日)など。桂月は大正期に入っても、紀行文に言文一致体を用いていない。
- ⑮ 例えば石井稲三編『美文紀行文』(明治三十八年二月二五日／又間精華堂)や久保天随編『明治百家文選』(明治三十九年九月二〇日／隆文館)。

紀行文の書き換えと文体の楽しみ

本田直次郎編『続紀行文粹』(明治四三年二月一日／春陽堂)などに麗水の紀行文の一部分が収録されている。

- ⑬ 初出は遅塚麗水「不二の高根」(「国民之友」一九九附録／明治二六年八月二三日)。
- ⑭ 句読点や送りがない、若干の漢字の用法を除いて、「不二の高根」(※注⑬参照)との異同はほとんど見られない。
- ⑮ 北川扶生子は「明治の紀行文―遅塚麗水『不二の高根』を中心に―」(鳥取大学教育地域科学部紀要 教育・人文科学) 四二／平成一五年一月三二日)で、麗水の紀行文家としての評価を決定したとされる。「不二の高根」(※注⑬参照)における日の出の描写について、「身振りの大きくなりがちな漢文系統の語彙と文体を用いて、できる限り細密に眼前の光景を」描こうとしていると指摘している。

- ⑯ 中山昭彦は「翻訳する／される『言文一致』―多言語性と単一言語性の間―」(「日本文学」四七―四／平成一〇年四月二〇日)で、明治三〇年代後半から四〇年代にかけての文章「作法」書群によく見られる文語体から言文一致体への書き換えの訓練について分析している。中山は「翻訳」という表現を用い、そのような書き換えにおいて、文語体と言文一致体とが「異質なものであるかも知れないのに、その異質さを消して、言文一致に移行し易いようにする(翻訳)が作動」していることを指摘している。本稿では、この中山論をふまえたうえで、一見言文一致化の物語にそぐわないような(翻訳)も、同時に作動していたことを指摘したい。

〔付記〕

引用にあたり、旧漢字は原則として新漢字に改め、ルビや傍線、傍点等は適宜省略した。

紀行文の書き換えと文体の楽しみ

なお本稿は、二〇〇四年度日本近代文学会関西支部秋季大会（二〇〇四年一〇月九日、於仏教大学）での口頭発表に基づくものである。会場内外で貴重な示唆を下された方々に感謝申し上げます。